

三重大学教育学部附属小学校 6年 大原 晴斗

「三重県の「当たり前」を、未来へ ～150 年間分のありがとうを次の 150 年へ～」

ぼくは三重県で生まれ育ちました。山も川も海も街もあるこの県で、自然の中で当たり前のように平和に暮らしてきました。

でも、その「当たり前」は、当たり前ではありませんでした。夏休みの自由研究で三重県の歴史を調べたとき、戦争で大きな被害を受けた後、人々が命懸けで街を立て直してきたことを知りました。また、ウミガメを守る砂浜の清掃活動やお祭りのゴミ拾いに参加したとき、気づきました。自然も街も、誰かが行動しなければ守れない。今ぼくが安心して暮らしているのは、たくさんの人が三重県を大切にしてくれてきたからです。

ぼくは、三重県の一番の宝物は、人の温かさだと思っています。塾へ向かうバスの中で、高齢の方へ自然と席を譲り合う姿を見かけます。通学路では、近所の方が「おはよう！気を付けてね」と声をかけてくれます。こうした何気ないやりとりが、三重県の温かい空気を作っているのだと思います。その思いやりは、言葉や物では表せないかもしれません。でも、ぼくはそれこそが三重県の立派な文化だと信じています。人と人が互いを思いやり、暖かく支えあう。

この「当たり前」が、三重県を三重県にしているのです。四月から、ぼくは中学生になります。電車で四十分かけて隣の市の学校へ通うことになり少し不安もあります。でも、この県なら大丈夫だと思えます。なぜなら、三重県は人が人を大切にする県だと知っているから。

150 年前、三重県が生まれたとき、きっと誰かが「いい県にしよう」と願ったはずです。その願いが、今の僕の「当たり前」を作ってくれました。だから今度は、ぼくたちの世代が次の 150 年のために、三重県を本気で守っていきます。ぼくは、この暖かい三重県で生まれ育ったことを誇りに思い、未来の子どもたちにも同じ思いを抱かせられる県にしていきたいです。